土曜
午前　宮城県のカキ養殖場へ
午後　ボランティアツアー客と合流。一緒にカキ養殖の仕掛け作り。作業後、漁師たちの計らいで水揚げしたばかりのカキをごちそうに

作業後にボランティアたちとほおばったカキ

日曜
午後　ツアー客の見送り
夜　漁師たちと居酒屋で懇談

月曜
午前　最上町へ戻る。愛犬の散歩
午後　戦国武将・最上義光にゆかりのある小国城跡で草刈り。観光資源開発の一環

火曜
午前　夏の観光企画会議
午後　仙台市内の大学で被災地復興政策をテーマに講演
夜　趣味のバイオリンを弾く

水曜
午前　漁師の作業所の設計
午後　小国城跡のあずま屋を修理。新しい風鈴をつける

木曜
午前　作業所の設計図を仕上げる
午後　近所の川で泳いだ後、作業所の建材を加工
夜　地元の温泉に日帰り入浴

金曜
午前　営業会議
午後　友人と登山
夜　ウイスキーを飲みながら東北の歴史に関する本を読む

趣味のバイオリンは3台所有。11歳から始めた

自由時在

山口スティーブさん
（トラベル東北社長）

ジョブONxOFF

被災漁村と支援者結ぶ

「さ、やるべ」。旅行会社「トラベル東北」（山形県最上町）社長の山口スティーブさん(53)は、流ちょうな山形弁で気合を入れるとツアー客と地元の漁師の輪に入って作業を始めた。

東日本大震災後の2011年6月から宮城県・牡鹿半島の漁村などで「被災地応援ボランティアツアー」を企画。参加者はカキやノリの養殖に使う仕掛け作りなどを手伝う。これまで60回を超すツアーを催し、延べ1100人が参加した。

日本人の妻の父が最上町で経営する土木建設会社を継いだのが東北との縁の始まり。6年前、「地元の豊富な観光資源を生かしたい」と小さな旅行会社を買収して、観光業に転じた。

奥の細道をたどるツアーなどの企画が評判に。軌道に乗り始めた時、震災が起きた。被災者を温泉に招く最上町の委託事業などで被災地へ足を運ぶ中、行政の支援が行き届かない牡鹿半島の実情を知り、ボランティアツアーを思い立った。

ツアーの実施にあたっては、地元の漁師と信頼関係を築き「本当に支援すべきニーズ」を引き出す。そこにボランティアたちの使命感をつなげて、双方の満足度を高めている。

6人のスタッフで運営する会社の社長に休日はほとんどない。だが、「仕事の大きな課題は頭の中にある」と手帳は持たない。会社の白板にも月単位のおおざっぱな予定を書き込むだけ。「米国出身なのに合理的でないと言われる」と笑うが、「大きな方向性さえ定まれば、自分がやるべきことが見えてきます」。

事前の約束なしに取引先を訪ねても、「ああ、スティーブさん、こっちも会いたかったんだよ」と、即断即決で物事が進むという。タイミングよく自在に行動できるのは、「勘」と、これまで築き上げた「人脈」のなせるわざのようだ。

自然に囲まれた生活は、仕事を思い切って中断し、登山や川泳ぎで「充電」することもできる。素早い決断力が質の高い仕事を実現させている。（上田詔子）

カキ養殖の仕掛け作りをボランティアたちに教える。「地元では、まだまだ人手不足です」（宮城県石巻市で）＝飯島啓太撮影

やまぐち・すてぃーぶ　1960年、米国カンザス州生まれ。スタンフォード大大学院修了。日本の戦後政治を専攻し、85年に来日。87～93年、三菱商事勤務。92年、山形県最上町出身の妻と結婚、日本国籍を取得し、義父の家業を継ぐ。2007年からトラベル東北社長。

平日

旅行会社の仕事と並行して、被災地では、土木建設会社時代の技術と経験を生かした支援も続けている。

漁師たちのコミュニティーの場となる仮設の休憩所や集会所＝写真＝を宮城県内の14か所に建設してきた。外資系企業や国際的な民間活動団体（NGO）などの寄付で実現したという。

漁師の休憩所建設 今は作業所を計画

また、現在は、個人の漁業者が、漁具の補修や保管をする倉庫兼作業所の建設も進めている。作業所は、海岸沿いではほとんどが津波で流されてしまったといい、広い作業台や棚の設置など、工夫を凝らした安価な木造の作業所を計画中だ。

ボランティアツアーの合間に、地元の漁師たちに設計図を見せ、「これでどうだべ？」と意見を募っている。